



坂折川右岸から横倉山方面を仰いだ沈下橋



宝篋印塔

沈下橋「坂折橋」

越知町内における、清流仁淀川の支流・坂折川にかかる唯一の沈下橋（幅：約2尺、長さ：約47尺、昭和27年建設）である。

かつてはこの辺りを、旧仁淀村に通じる「森往還」（旧国道）が通っていて、木橋を渡って文徳に上がり、（途中不明）大平を経て、森（旧仁淀村）に向かう。幕末の文久2（1862）年4月8日、土佐藩の参与・吉田東洋を暗殺した土佐勤王党の那須信吾・安岡嘉助・大石団蔵の3士が脱藩したのもこの森往還である。

左岸の低位段丘上にある文徳集落には、越知町内で最も古い縄文時代早期（約1万年前～8000年前）の「文徳遺跡」がある。主な遺物として、「楕円押型文土器」、「葛島式土器」、石鏃などが出土している。この他に、大分県姫島産の黒曜石で製作された石鏃なども見つっている。ちなみに、これよりもさらに時代の古い隣の佐川町の「不動ヶ岩屋洞穴遺跡」〔縄文草創期～早期（1万2000年～1万年前）：国指定文化財〕からも同産地の黒曜石の他、香川県産のサヌカイト製の石鏃も見つかっており、本地域がそれら遠く隔たった地域と交流があったことがわかる。

文徳には、中世には横倉山修験道の「横倉寺」（山号：別府山延命院）の別院、僧坊があったとされ、集落内の民家の庭先には、供養塔もしくは墓碑塔である五輪塔が11基と宝篋印塔が1基現在も残っている。また、ほど近い北側山麓には高さ約1尺の小振りながら精巧でみごとな花崗岩製の宝篋印塔〔室町時代：越知町指定文化財〕〔写真〕がある。

文徳は、明治以降は高知方面から横倉山への登山道で、昭和9（1934）年8月2日に牧野富太郎博士（当時73歳）が、植物採集会のため「土佐の會」の一行150数名を横倉山に案内した際もここを登山口としており（帰りは横倉山北斜面の楠神に下りている）、現在は「四国のみち」となっている。

坂折橋のすぐ上流は淵になっていて、かつて子供たちの夏休みの絶好の水泳場（“小森”）として賑わったが、昭和63（1988）年上流に桐見ダムができてからは水質が低下（水質検査では問題ない）し、以前のような清らかさではなくなってしまった。

この河原の石には、本流の仁淀川ほどのカラフルさはないが、岩石の種類は多く、特に上流に大樽の滝から流れてきた大樽滝川があるため、4億年前の花崗岩類・変成岩類などの日本屈指の古い岩石が見られる。また、量はめっきり少なくなったが、横倉山から運ばれて来た日本最古の4億年前の石灰岩（“土佐桜”石灰岩）も見られ、運が良ければその中に含まれるクサリサンゴやハチノスサンゴなどの化石が見つかることもある。

平成13（2001）年には、このすぐ上流で、体長1.2尺の県下で二番目に大きい“生きた化石”オオサンショウウオ〔国の特別天然記念物〕が採捕されており、横倉山自然の森博物館にはその実物大の模型が展示されている。坂折川では、四国で唯一オオサンショウウオが自然繁殖していることが確実視されている。

『土佐横倉山の植物』

大倉 浩典

最近見つかった、横倉山の植物調査に関する記録の第二弾として、牧野富太郎博士と同じ佐川町出身で博士の第一の愛弟子、世界的な菌類学者、そして、コオロギランの第一発見者（和名命名：牧野富太郎）である吉永虎馬の論文を紹介する。出典は、『史跡名勝天然記念物 第5巻第8号』（昭

和5、内務省）で、その中の「土佐横倉山の植物」である。今から半世紀以上の65年前の横倉山の姿、とりわけ植生を知る上で貴重な記録といえる。

旧漢字が多く読みづらいため、表現はそのまま漢字に関しては一部当用漢字に改めるカルビをふって判り易くした。

土佐横倉山の植物

横倉山は高知県高岡郡越知町の西方に聳ゆる山彙であって、剣山脈の一部である鶏形山脈（鳥形山系のこと？）に属し、本源を愛媛県面河溪より発して南太平洋に注ぐ仁淀川の清流は、其東北山麓を繞って流れて居る。此山は又金峰山の称あれども、陸地測量部の五万分ノ一地形図越知図幅を初め多くの図に此の如き山名の記されていないのは寧ろ意外に感ぜらるる。

此山彙は主として高岡郡越知町、大桐村、別府村と而して長者村の一部とに跨って随分広き面積を占めて居るが、最高峰と雖ども1000米を出づること僅であって、然も大部分は樹木の生ずること少く草原の状態をなして居る、唯東方越知町に対する数峰のみは、高山頂に近き部分が原始林となりて著しく、且其山容の奇なるは専ら石灰岩より成るが為めであって、其高さ僅に800米を超えざる小山にも拘らず、其山麓を過ぐるものをして必ず願望せしめて止まぬのである。併し前記せるが如く全山彙としては周囲の山に対して頗る低さを以て、遠くより之を望む時には、余程山容を見慣れたるものでなければ、明に之を指點することを得ないのである。而して普通に横倉山の名称を以て人に知られて居るのは、其原始林を以て蔽はれたる部分である。

仁淀川岸に沿ふて愛媛県に通ずる県道の未開かれざる前、又山彙の南側仁淀川の一支流由行寺川（坂折川）辺に通じたる道路の改修せられざりし前には別府村の主邑森には此山を越ゆる方が最も近くて便なりし故に、越知町より此山彙の頂を東西に横ぎる約4里

の坂路は、可なり人通りが多くて賑ふたのであるが、今は特に登山と神社の参詣をなすものゝ外旅人は全く通らぬ様になったので、原始林より西方に通ずる路は殆んど廢れたのである。

横倉山は前に記したるが如く、高さに於ては我高知県の如き山国にては殆んど注意するに足らぬ山であるにも拘らず、可なり昔より多くの

人に知られているのは、同山が奇抜なる山容を有するのと、平家一族の屋島戦敗後、安徳天皇を奉じて、阿波方面より四国山脈の奥地を辿りて終に此地に遁れ、此處を安住の場所と定めたりとの傳説を遺し、多くの史蹟を存し特に山中鞠ヶ岡と称する平坦の地には、明治18年に定められたる安徳天皇御陵墓傳説地ありて宮内省の所管に入り、又同天皇を奉祀する御嶽神社（上の宮；現横倉宮）及杉原神社（中の宮；現杉原神社）並に住吉神社、熊野神社等あり、且つ数十丈に達する石灰岩壁の屹立する奇勝、平家窟と称する石灰洞や、又峰を隔てて之に対する閃緑岩（正確には流紋岩～石英斑岩）より成る住吉の大岩崖、空池と称する石灰岩の凹地等、山中諸所に史蹟傳説と結び着けられたる場所多く、尚両大岩壁の頂上に立てば、眺望極めて広濶、南方は大平洋を望み東方は高知平野を下瞰し併せて四国東部の諸高山を遥望し得べく、北方は四国の主山脈に対して石鎚・筒城（上）・手箱等の秀峯（峰）を望む事が出来る随つて登山参拝者が絶えぬのである。

此山は以上に記したる如き種々の特色を有するを以て、さきに本県にては史蹟名勝地として指定し其の標石を建設したのである。この山の原始林は畢竟史蹟傳説と神社等の関係より保存せられて今日に及びしものにて、老樹蒼鬱として繁り、特に巨大なる杉の美林を有するを以て名高い、而して山中所生の植物には比較的多数の種類を含み、殊に珍奇の品種に富めることは、此の如く低く且つ小面積の山としては著しい事実である。此山のよく明にせられたる一の理由は、彼の牧野富太郎博士が私と同じく此地を東南に距る約1里半の小都会佐川町の出身であって、往年郷里に在住せられたる頃には常に此山を植物園の如くにして研究せられたる結果、一草一木も殆んど洩らすことなく取調べられたに因るので、同氏が新種として公にせられたるものゝ中、此地のものを記述されたるものが相当に多いのである。

此山は元私共の旧藩時代の邑主であった深尾家の所有であったので、其時代には実によく其森林が保存せられて居たとの事であるが、明治維新後同家の手を離れて一度は国有林に編入された事もあり、其後転々として私人の手に移りしため其美林を伐採せんとするも



フクリンササユリ



ヒナラン

のを生じ、地元越知町の人々の間にも之に賛同するものと、反対するものを生じて互に相抗争すること多年、既に一部は先年伐採に着手せられて著しく其林相を破壊したるため、心ある者をして慨嘆せしめて止まなかつたのである。然るに又昨年(1940年)に至りて杉原神社付近の杉の美林に手を着くるに至り、其巨材を運搬するために、古来更らざりし参詣の階段道路も縦横に破壊せらるゝの惨状を見た

るが、財界不況の爲当事者間に争論を起して訴訟沙汰となりしとかにて目下中止の状態となつて居る。兎に角千古斧鉞の入りざりし森林に日光の射入することゝなりしため、生態上に顕著なる影響を与え其植生を乱りしことは遺憾千万である。

抑々横倉山が史蹟名勝と共に著しきは、此等の原始林ありて其背景をなすに因るのであって、若し此森林を失ひ所生植物の分布状態を破るに至らば其価値は全く減ぜられて爾後多く顧みられざるに至るならん。地元の人々などは経済上の関係其他種々の事情もありて、他より簡単に論ずべき問題でないと思はるれども、此の如き史蹟名勝を伴ふて天然記念物に富める山を有し、然も登るに多くの時間を要せず且つ至便の地位にあるのは、土地の誇として今後出来る丈保護に努められん事を切に祈るのである。

此山に登るには、高知市方面よりは省線高知線によりて西佐川駅に下車すれば、これより自動車の便あり山麓文徳迄約2里、而して普通の登山道は3あり、一は東麓文徳より登るもので勾配が緩く、約1里許(計?)を費して杉原神社に達することを得べく、一は越知の町より約半里なる楠神よりするもので、坂路極めて急峻半里にして神社に近き文徳道に会することを得る、尚一は西北麓野老山、上ノ峠よりするもので、坂路は1里に足らず且つ緩なれど、其降り口、市ヶ谷は越知の町より殆んど2里であるので、高知方面より赴くものは前の2路を撰ぶのが便利である。

私は史蹟の事などは略して、単に此山の所生植物全般を左に紹介して見んと思ふ、而して其順序は文徳より登山道を辿りつゝあるものとして記すことゝせん。

先づ文徳より約500米位も登れば横道となりて山の北側を繞る、それ迄に見るものにはヤマトキサ(ソ)ウ*、モウセンゴケ、フクリンササユリ、アサマリンド(ドウ)、キツネヤナギ*、ヤマヤナギ、コバノトネリコ(アオダモ)等がある。更に横道を辿りて石段下迄に至る路傍にはヒナラン、ハコネサ(ソ)ウ(ハコネシダ)、カキラン、ヒメミヤマスミレ、フデリンダ(ドウ)、オホ(オ)ハンゲ、フタリシヅ(ズ)カ、ミヤマウツ(ズ)ラ、サラサドウダン、トサノミツバツ(ツ)ジ、イタヤメイゲツ(コハウチワカエデ)等を見るべく、石段下より深林に入る辺にはユクノキ*、ケタガネサ(ソ)ウ、ハンショウヅル、マタタビ、オホ(オ)クサソテツ*、コフウロ、ミヤマシケンシダ*等生じ、又近頃中井博士によりて新

種として発表せられたるヤマトチャセンシダ*も湿润なる巖側に生じて居る、又嘗ては此辺にヒメサジラン*、カラクサシダなども採りたることあれども今は見えず、尚トキハ(ワ)シダ、アヲ(オ)ガネシダも此付近にある、こゝより深林に入りて数百段の石段を踏みて登る、此辺一帯古生層の石灰岩よりなりヤブソテツ*、メヤブソテツ、オホバノキノモトサウ(オオバノイノモトソウ)、キヨズ(ス)ミヒメワラビ、イハ(ワ)オモダカ(樹上)、ヒメノキシノブ、コミヤマスマレ、ヒメチドメグサ(ヒメチドメ)、ヒメウハ(ワ)バミサ(ソ)ウ、テンナンセ(シヨ)ウ、マムシグサ、サンセ(シヨ)ウサ(ソ)ウ、ツルハコベ*、ヒメトラノヲシダ(ヒメトラノオ)*、アヲ(オ)ホラゴケ等を生ず、既に登り尽して杉原神社に近けば稍平坦の地となりて老杉枝を交へ樹下には次の如き植物を見る。モミヂ(ジ)ガサ、タイミンガサ、ギンバイサ(ソ)ウ、ハ(ホ)ウチャクサ(ソ)ウ、ミヤマカタバミ、ナベワリ、ホソバイヌワラビ、トチバニンジン、マイヅルテンナンシャ(ヨ)ウ*、ヤマイヌワラビ、ツルリンダ(ドウ)、コホ(オ)ロギラン此最後に挙げたる蕨類たる珍植物は、明治22年9月牧野博士に随ふて此山に登りたる際、御塚墓傳説地付近に於て初めて発見し同博士によりて露国のマキシモウイキッチ(マキシモウイッチ)氏の鑑定を請はれたるに、氏は其珍奇なるに驚嘆して一新属を創定したるものである。又杉の皮に附くものにキヨズ(ス)ミコケシノブと苔類の珍種カタバゴケがある。

杉原神社前にある杉はいずれも非常によく伸長して見事なる樹姿を示して居る、而して其巨幹轟々天に聳ゆるの状態は実に壯観である。今大なるものゝ幹周(幹周)を掲ぐれば左の如くである。

	目通り(尺)	根廻り(尺)
a	22.9	28.2
b	21.2	31.0
c	20.2	29.0
d	18.0	25.0

此社地より漸次爪先上りに御嶽神社に至る迄には、小溪流に沿ひたる湿润の地ありてアケボノシュスラン、クマガヘ(イ)サ(ソ)ウ、ヤマヂ(ジ)ワ(オ)ウ、シソバツツナミ、カンアフヒ(オイ)、クサヤツデ、カ(コ)ウヤコケシノブ、ツルカノコサ(ソ)ウ、ヤマアヅ(イ)、コクハガタ(クワガタソウ)、スギラン(樹上)*、牧野博士によりて創めて新種として発表せられたるミドリワラビ等あり、又此辺に巨大なるカツラの老樹ありしも既に伐採し去られしことは残念の至りである。

御嶽神社は露はれたる傍らありて、其背後は眺望極めて佳なるも、数十丈の絶壁(“馬鹿試し”)となりて頗る危険である、此付近には所謂石灰植物(好石灰岩植物)と見做すべきもの多く左の如きものを見る。

牧野博士によりて新種と認められたるヨコグラノキ、コシデ(イワシデ)、ヨコグラブドウ、



ココロギラン

竝にイハ(ワ)ツクバネウツギ、イブキビヤクシ*、ベニカヤラン(樹上)、ビヤクシン(多くは蓋採せられて僅に存ずるを見る)、此崖側より崖下石灰洞(平家窟) [平家穴] 付近にはキマウグヒ(イ)ス*、シギンカラマツ、イハ(ワ)デンダ*、クモノスシダ、ウメガササ(ソ)ウ、ヤハズハハコ、ヒメ(ナ)シャジン、イヌトウキ、イハ(ワ)キンバイ、イヌトウキ、イテフシダ(イチヨウシダ) (折々岩罅に生ず)、ジャウラウホトトギス(ジョウロウホトトギス) (マキシモヴィッチ氏によりて新学名を附せられ、牧野博士著日本植物志図篇第1巻第1集第1版に図示せられたるものは実に此地の産である) 此辺より溪間に沿ふて登り御陵墓傳説地前に至る、ミツパコンロンサ(ソ)ウ、ヒメレンゲ、ギンラン等を見る、此溪は山中第一に水多きところにして、他の溪間には水の溜れること多けれども此処には殆んど尽ることなし、随って常に湿潤の地に富み、エビネ、サルメンエビネ、ナツエビネ、ヒメケイラン[コケイラン]、マルバフユイチゴ[コバナフユイチゴ]、ワ(オ)ウレンシダ、ウスヒメワラビ、ヤマドリシダ*、タニギキヤ(ヨ)ウ、カ(コ)ウヤノマンネンズギ*等を生ず、此処より住吉神社に至る迄の横道はナガバノスミレサイシン、ナラキ(イ)シダ*、ヨコグラツクバネ、コガネコノメサウ[コガネコノメソウ]、ミヤマムグラ、ミヤマウグヒ(イ)スカグラ、ヒトリシヅ(ズ)カ、ウスバヘウ(ヒョウ)タンボク、ミツパテンナンセ(シヨ)ウ、マツブサ*等を見るべく、住吉神社は閃緑岩(正しくは流紋岩~石英斑岩)より成る絶壁上に在りて社頭までは又数丈、鉄鎖に倚(依)りて下ることが出来る、トサノミツバツツジ、ミヤマガンピ、クロソヨゴ、ベニダウン(ベニドウダン)等の灌木と混りて初めてヒメコマツ*、ツガ等あり、其樹幹にはマメラン(マメツタラン)、サルノヲガセ(サルオガセ)*等を生ず、巖際にはイハ(ワ)カンスゲ、ケイビラン等生じ、之と混生してウテ(チヨ)ウラン、を見しも、亦蓋採の結果大いに減少せしは惜しむべきことである。尚岩面には諸処イハタケ附着せり、此巖頭より東南望

すれば遠く眼界を遮るものなく、本県東部の平野及南海を一望し得べく、山中随一の好景の場所である。此処より山背によりて少しく登れば空池の凹地に降るべき頂点に達す、高さ凡そ800米、所謂横倉山の最高点である。モミ、アサダ等の樹下にはミヤマシキ

ミを生じてゐる、空池は一部石灰岩を以て囲れたる低窪の土地で、恰も池の溜れたるが如き状態となつてゐるので其名を得たのである、クマガヘサウ(クマガイソウ)、フタバラン*、ヒメケイラン等を生じ、又ミドリワラビ、オホ(オ)クジャクシダなどがよく發育して居る。

これで大體山中を巡りつゝ所生植物の主なるものを記したのであるが、尚御陵墓傳説地附近にはヒロウドラン*、ベニシユスラン*等を見るべく、樹木の既に記されたるものゝ外、普通に見るものは左の如きものがある。アカシデ、イヌシデ、クマシデ、ヨグソミネバリ、ケクロモジ、コハウチハ(ワ)カエデ、アヲ(オ)キ、マツラニツケイ[イヌガシ]、ホウ(オ)ノキ、チドリノキ、アカガシ、ウラジロガシ、コシアブラ、イモノキ[タカノツメ]、ニ(ミ)ズキ、メウリノキ、カチ(ジ)カヘ(エ)デ*、コヤブデマリ[ヤブデマリ]*、ウリハダカヘ(エ)デ、ヤマモミチ*、アサヒカヘ(エ)デ*、トキハ(ワ)カヘ(エ)デ*、シラキ、ハリギリ、ケヤキ、シキミ、アカツツジ[オンツツジ]*、アヲ(オ)ガシ、バリバリノキ、カゴノキ、カナクキノキ、シロダモ、ガクアチ(ジ)サキ(イ)、サハ(ワ)フタギ、ウシコロシ[カマツカ]等、此山の樹木に就きては、往年登山せられたる白井博士の調べられたる目録が、植物学雑誌の同博士四国地方旅行記に掲載せられて居る。

尚楠神に下る坂路にはイハ(ワ)タバコ、ダイモンジサ(ソ)ウ多く、楠神部落の石垣の間にはタチハコベが生えて居る、又上の峠に下る方面にはタキミシダ、ハヤマシダがあり、此の下り口、野老山市ケ谷より楠神附近迄の仁淀川に沿へる県道側にはイハ(ワ)ギリサ(ソ)ウ、イハ(ワ)ヒバ、ヒナラン(白花品もあり)の生ずるを見る。

此他ヨコグラタケ*、ヨコグラタチムカデゴケ*などの如き菌類や、苔類其外蘇類で外国専門学者により新種として学界に報告せられたものが尠くない。以上記したところは極めて蕪雑であるが、此海南僻陬の小山が比較的所生植物の種類に富み、且つは史蹟名勝を伴へる地であることの面影を幾分にも明にしたりとせば、誠に幸の至りである。

(おくら こうすけ/植物研究者)



イチヨウシダ



ギンバイソウ

●吉永虎馬 略歴

明治4(1871)~昭和21(1946)年。高知県佐川町(旧佐川村)生まれ。同郷の牧野富太郎とは9歳違いで早くから親しみ、植物学の道に進む。植物学者。明治25(1892)年、高知師範学校卒業後、小学校・中学校・高等女学校の教員を務める。昭和9(1934)年、高知高等学校(現高知大学)講師、昭和19年同校教授、同年退官。高知営林局(現四国管財管理局)嘱託。高等植物は牧野博士に、苔類・菌類はドイツの植物学者の指導を受け、終生植物研究に没頭。コオロギラン、キレンゲシヨウマ、トサボウフウ等々多数の新種を発見し、「四国植物誌」(英文)を発表するなど、豊富な植物知識で戦前の県内の教員・植物研究者を指導、その功績は大きい。昭和21(1946)年2月22日没(75歳)。

●白井光太郎 (しらいみつたろう)

文久3(1863)~昭和7(1932)年。江戸(現東京都)生まれ。植物病理学者、本草学者、菌類学者。東京帝国大学理科大学(現東京大学理学部)植物学科卒業。1899~1901年までドイツに留学して植物病理学の研究に取り組む。帰国後東京帝国大学農科大学に世界初となる植物病理学講座を新設し、教授となる。日本植物病理学会を設立、初代会長に就任。植物に感染する病原菌の分類、記載を行う。

●中井猛之進 (なかいたけのしん)

明治15(1882)~昭和27(1952)年。岐阜県生まれ。東京帝国大学理科大学植物学科卒、植物分類学者。東大教授、小石川植物園長、国立科学博物館長。「大日本植物誌」他著。

- ※「横倉山植物名鑑」(2012,横倉山自然の森博物館)に記載のないもの
- 植物名の後の〔 〕は、現在の呼び名



牧野富太郎博士も学んだ儒学者・伊藤蘭林

安井 敏夫

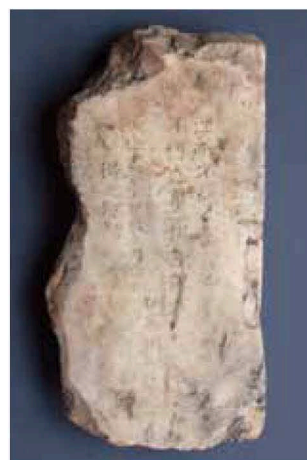
藩政時代に幾多の著名人を輩出し“文教の町”として知られる高知県佐川町で、土佐山内家筆頭家老深尾氏の家塾（後に郷校）・名教館の教授と私塾・蘭林塾（“伊藤塾”）の塾頭で儒学者でもあつた

伊藤蘭林（本名・徳裕）(1815-1895) の使った硯が、このほど発見された。地元佐川町の文化財保護審議委員が、佐川町総合文化センターにある収蔵庫内で探し物をしていて偶然見つかったという。折しも今年2015年は伊藤蘭林の生誕200年に当り、それに合わせたかのように、今回（発見は昨年2月）蘭林自らが製作した硯が発見されたことになる。本硯に関しては、『佐川史談 霧生関 第五十号』（佐川史談会、2014）の表紙の写真として掲載されており、裏表紙には解説が記されている。

普通硯と言え、黒色を主体としそれに若干紫色の混じった粘板岩もしくは一部凝灰岩質なものを原石とするものが多い。中国の代用的な硯として有名な「端溪硯」（中国広東省高要市）も紫色を基調とし、国内では「雨畑硯」（山梨県）、「玄昌硯」（宮城県）、「赤間硯」（山口県）、「那智硯」（和歌山県）など優れた硯石によるものがあるが、このうち、「赤間硯」が凝灰質と思われる灰紫色を呈している他はすべて黒色の粘板岩である。高知県では「三原硯」〔四万十帯〕が有名であるが、これもやはり黒色粘板岩が原石である。

このような“常識”とは裏腹に、今回見つかった蘭林の硯は何故か“白っぽい（乳白色）”材質の石を選

んだ“風変わりな”ものといえる〔写真〕。その理由は、硯の裏面に、蘭林自刻の「涅而不緇天質潔白 不朽盛事一捐餘涙」という文字が刻まれており、温厚質直と評されたばかりでなく、自らも「純粹潔白」であると称していることから、敢えて不純物を含まない（“純粹な”）白い硯を作製・使用したことが読み取れる〔写真〕。蘭林の晩年の掛軸などはいくつかあるが、若い頃の遺品は現在ほとんど残っておらず、その点からも貴重であるが、温厚篤実な人柄として評される上に自らも“潔白さ”を示したものとして注目される。



硯は、縦30.3㍉、横16.0㍉、厚さ4.8㍉で、裏側銘には、硯の原石は「モミノキ山産 天保十五年甲辰三月吉日 得之柳野」とあり、旧吾北村柳野（縦ノ木山産のものと思われる。現地調査の結果、本地域は変成岩（三波川結晶片岩）の分布域である三波川帯南縁部に当り、かつての海底火山活動によって噴出した塩基性凝灰岩を源岩とする“緑色片岩”中に挟まれた石灰質片岩（一見大理石に似る）に由来する可能性が高いことがわかった。ただし、硯として使用されているものは、純白ではなく微量の不純物の混入のためかやや淡黄褐色を帯びた粘り気のあるものである。蘭林自身が柳野（縦ノ木山の南西約4km）に来た折、知人の誰かから懇願して譲り受けたものと思われ、この時があるいはそれよりも以前から敢えて白い硯を作りたいという思いがあったのであろう。

蘭林がこの硯を作製したのが天保15（1844）年、29歳の時で、牧野博士は明治4（1871）年、9歳の時それまで通っていた寺子屋が廃止されたため「蘭林塾」へ移りそこで学んでいる。





〔墓誌〕

〔左側面〕

嗚呼自余始受句讀以上解訓話通大義皆出於先生之教誨矣余豈忍銘先生之墓哉亦不忍不銘也及叙之曰先生諱德裕字益卿號蘭林又有山陰及六水入號伊藤氏土佐佐川人考諱德正妣片岡氏家世仕國老深尾氏先生夙任教職王政維新從事

〔背面〕

鄉譽致仕後就家而學者亦當不絕以明治廿八年三月十四日終距生文化十二年九月廿八日年八十一葬先塋次配小川氏無子先生為人溫厚質直自奉儉薄接人一以至誠其耳順古稀八秩之賀上壽者傾一鄉及葬來送者亦數百人余則久離鄉不得執

〔右側面〕

紳不堪痛歎也先生學藝該通至書法數槍刀靡不究又嗜詩歌所著有蘭林詩抄土佐之口網嘗書訓戒數條遺後臨歿無復片言及後事云遂係以銘曰純乎其德孰不則之貞珉勒跡模喪範永垂

茨木定興謹撰并書

(原文のまま)

この時蘭林は56歳である。硯は自然石の形を利用し縁が広く、主たるくぼみ（海と陸）の横にさらに小さなくぼみ（海）があり、そこにかすかに朱色の墨（朱墨）が残っており、恐らく塾生の書の添削、答案の採点等に使ったものと思われ、牧野博士も指導・添削を受けたのかもしれない。ちなみに、牧野博士の号である『結網』（結網子、結網学人ともいう）は、蘭林塾で学んだ漢文の中の「古人曰あり、淵に臨んで魚を羨まんよりは、退いて網を結ぶに如かず」の一文からとったものである。

蘭林は、天文・暦算・書法、槍・剣・射・騎術などに秀で詩歌をたしなみ、私塾・蘭林塾をも開設しており、名教館では、門下生として幕末の志士で脱藩後に新政府の初代宮内大臣に就任した田中光顕や、植物分類学の祖・牧野富太郎ら佐川が輩出した数々の偉人たちの多くが「蘭林塾」で学問を修めている。この他、牧野博士と親しくコロギランの発見者である植物学者・吉永虎馬、『セルボーンの博物誌』の翻訳者・西谷退三、音楽家・外山国彦等々の多くの著名人も蘭林の教えを受けており、“文教のまち佐川”の礎を築き、文武両道の教育者であつた蘭林の卓越した指導ぶりが伺える。

蘭林は、明治28（1895）年3月14日、81歳で没し、

翌年門弟たちによって霧生関峠に「伊藤蘭林紀徳碑」が建てられた。現在は佐川町上郷「田中公園」内に移築されているが、最近になってさらに、蘭林の功績を讃えるべく、一部の地元有志によって、佐川城跡の東麓の目細谷にある蘭林の生家（屋敷跡）の傍らに「伊藤蘭林顕彰碑」が新たに建立された。すぐ上段には蘭林の墓『伊藤徳裕之墓』が妻（小野家から嫁入り）と並んで東向きに、そして、蘭林の息子・乗汎の妻（向坂家から嫁入り）と孫（二人）の墓とともにひっそりと建っている〔写真〕。墓石は極めて均質な細粒～極細粒の砂岩製で、背面と両側面の三面全面にわたって、蘭林に学び後に名教館の教授となつた茨木定興（号：皆山）撰并書による306字もの漢字から成る碑文が丹念に刻まれていて、蘭林の功績の大きさを伺い知ることができる。

蘭林の教授した郷校・名教館（明治7年に佐川小学校となる）は、その玄関を佐川町上郷地区に移築し復元され〔写真〕、一方、私塾・蘭林塾は同西町に再建されて、当時の面影を今に伝えている。

〔協力〕伊藤蘭林の肖像（佐川町立青山文庫所蔵）及び硯（高知県佐川町教育委員会蔵）の写真掲載に関し、各々の協力を得た。また、佐川町・越知町文化財保護審議委員の大原純一氏には、蘭林の墓地の案内など協力を願った。

（やすいとしお／横倉山自然の森博物館学芸員）



博物館行事

企画展：「ヒトと野生動物との共生－鳥獣被害から田畑を守る－」

2014年8月2日(土)～10月19日(日)

〔協力：認定NPO法人 四国自然史科学研究センター〕



近年、本来人間と野生動物の生活圏の境界であった里山の自然環境の変化や自然界の食糧不足などが原因で、シカが山の山林の植生に食害を与えたり、イノシシや

サルなどがエサを求めて里山の人家近くまで出没し、田畑の作物を荒らしたりするなどの被害が目立つようになってきた。私たち人間は、このような野生動物による被害から生活を守るためにさまざまな手段を講じてきたし、今後もずっと続いていくことになる。今日の状況・事態に至った背景には、元々野生動物の生活圏に、人間が田畑の拡張や植林などによって進出していったという経緯があり、そういった意味からも、私たち人間は野生動物と共生して生きていかななくてはならない。

今回の企画展では、イノシシ・ハクビシン・シカ・カラスなどの剥製（計8点）とパネル、捕獲用具、防除用資材

などの資料を基に、野生動物による被害の実態とそれに対するいろんな対策方法などを紹介し、野生動物の被害から生活を守ると同時に、人間と同じ生態系の一員である野生動物とがうまく共生していくための方策を考える。

期間中、関連イベントとして、◎講演：「イノシシ、シカから田畑を守る」「サルを知って、サルから守る」〔四国自然史科学研究センター〕、「鳥獣被害と高知県の取り組み」〔高知県鳥獣対策課〕、◎ジビエ料理教室が開催され、より理解を深めるための手立てとする。

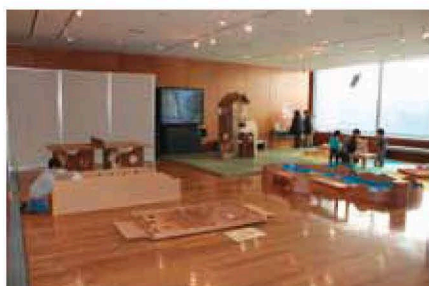
鳥獣被害の6割以上がイノシシとシカによるもので、サルは集団で行動し賢いので、一度「エサ場」と思ったら毎年そこにやって来るようである。そもそも「野生動物はなぜ集落（里山）に来るのか？」について考える必要があるが、その主な理由として①エサがある、②無意識の「餌付け」が挙げられ、野生動物の習性を知り、防護柵を設置する前に先ずエサとなる放置した果実（カキ・ミカンなど）を取り除くことが必要である。防護柵の一つである電気柵は、電線が草に触れていると漏電して効き目がなく、設置後の維持管理が重要である。

ジビエ料理教室では、捕獲されたシカ肉を使ったローストビーフ、ロース、シカ汁などを調理して有効利用した〔写真〕。



企画展：「人と地球にやさしい！ エコなあそび展」

2014年12月20日(土)～2015年2月1日(日)



高知県は県土の84%が森林で、しかもさらにその65%が植林（人工林）で占められた“森林大国”である。しかしながら、時代とともに日本産木材を使った家屋

が少なくなり、林業が振るわなくなり、山が手入れがされずに荒れ放題となっている。そんな中で、最近“森の役割”や“森の大切さ”が問われ出し、学校の総合学習などで間伐体験をするなどして少しずつ森が生き返りつつある。

今回、この間伐で生じた木材を有効に活用し、滑り台や

木馬、メリーゴーランドなどの遊具で子供たちに遊びに興じてもらうとともに、木の暖かみや癒し効果のある香りを体感し、併せて、子供たちや大人たちにも、森の役割や大切さを実感してもらいたいという思いから、遊具とパネルを使ったこのような企画展を開催することになった。

主な感想として、「楽しかった」「また来たい」という感想が圧倒的に多かった。その他「木のおもちゃは暖かみがあっていいですね」「大人も意外に楽しめました。子供には木のぬくもりのある玩具を揃えてあげたいと思いました」「あたたかみのある玩具ばかりで楽しく遊べました」などがあつた。



友の会だより

「“天空の城”竹田城跡と投入堂を訪ねて」

2014年11月15日(土)・16日(日)

〔参加者：16名（内事務局3名）〕



『日本100名城』の一つで、雲海に浮かぶ山城として人気の高い“天空の城”竹田城跡（兵庫県朝来市）と横倉山と同じ修験道の山、三徳山三佛寺・投入堂（鳥

取県東伯郡三朝町）の視察・研修を行う。

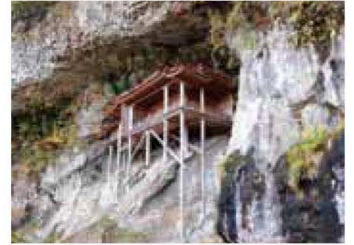
竹田城跡は標高353.7mの古城山山頂部に築かれた堅固な石垣から成る山城で、但馬の守護大名・山名宗全によって嘉吉3（1443）年に築城されたとされる。初代当主太田垣光景に始まり第7代・輝延の天正8（1580）年まで130年間続いた後、桑山修理太夫重晴が5年間城主を務め、天正13（1585）年から赤松広秀が城主となり、今日の豪壮・堅固な石垣を有する城郭を整備したと言われる。広秀は慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いで西軍に属し敗れた後自刃したため、竹田城は城主不在となり廃城に至る。今日までの

400年間一度も石垣が崩れなかったのは、“穴太衆”と呼ばれる専門の石工によって築かれた「野面積み」(穴太積み)によるところが大きいと言われている。切り出した石を加工せずそのままの形で築いた、一見粗雑な石積工法であるが地震に強く、高知城の石垣も野面積みで、過去の南海地震の際も大した崩落はなかったという。

三徳山三佛寺・投入堂は、三徳山(国立公園)の頂上付近の断崖に建つ、「三徳山修験道」の一番奥にある中心的建造物(奥院)である。本尊は「金剛蔵王大権現」、建物は

平安後期の作で、現存する神社建築では国内最古の部類に属し、国宝に指定されている。修験道場らしく、投入堂に至るまでの道りは険しく、余程の心構えがないと危険で、規制もある。

越知町小日浦にもこれとよく似た立地条件の「聖神社」と呼ばれるものがあり、建物そのものははるかに劣るが、谷側にそそり立つ断崖絶壁の洞穴にあり“土佐の投入堂”と呼ぶにふさわしいものである。



横倉山ミニ歳時記

■イナモリソウ多数開花

アカネ科の希少植物「イナモリソウ」(漢名: 稻森草) [*Pseudopyxis depressa* Miq.] が、昨年(6月14日)は横倉山の杉原神社表参道と鳥居の間で数多く開花した〔写真〕。これまで20年間は、同神社正面の石垣にわずかに見られるだけであったので、その多さに少々目を疑った。

葉は両面に短毛を密生し、2枚ずつ対生に4枚(稀に6枚)つけ、茎頂に淡紫(紅紫)色の五列合弁の花を1~2開く。関東以西に分布し、県内では北東部と西部(幡多地方を除く)で多く見られるが、中部では少ない。

和名の由来は、江戸時代に尾張の花屋の九兵衛という人物が、伊勢(三重県)菰野の稻森山でこれを見つけ、発見場所にちなんで「イナモリソウ」と名付けたことにより、それが広まったという。〔写真提供: 篠原 保氏(愛媛県)〕



【博物館日誌(抄)・平成27年度博物館行事予定】

- 2014年12月20日(土)~2015年2月1日(日)
 - 企画展: 「人と地球にやさしい! エコなあそび展」
- 2015年2月11日(水・祝)~3月29日(日)
 - 企画展: 「布が咲く-にしみねくみ 草木染の物作り-」
- 3月26日(木) 博物館協議会
- 4月18日(土)~6月7日(日)
 - 企画展: 「高橋宣之写真展-仁淀川流域の自然-」(仮称)
 - ※変更の可能性あり
- 6月17日(水)~6月28日(日)
 - 写真展「土佐」
- 7月18日(土)~9月6日(日)
 - 企画展: 「土佐のカエル 2015」
- 8月1日(土) 夏休み博物館教室〔工作〕「勾玉作り」
- 8月2日(日) 夏休み自由研究サポート事業(テーマ: 森)
- 8月9日(日) 夏休み自由研究サポート事業(テーマ: 森)
- 8月22日(土) 夏休み博物館教室〔工作〕(午前・午後)
 - 「オリジナル万華鏡作り」
- 9月19日(土)~11月8日(日)
 - 企画展: 「西村洋一 水彩画展」(仮称)
- 11月21日(土)~2016年1月11日(月・祝)
 - 企画展: 「灯りの世界展」(仮称)

【博物館友の会「フォレストクラブ」平成27年度活動予定】

- 11月29日(土)・30日(日)〔一泊二日〕
 - “天空の城”竹田城跡、投入堂を訪ねて
- 2015年1月1日(木・祝)
 - 初日の出を横倉山で
- 4月4日(土) 天体観測-皆既月食-
- 4月18日(土) “土佐の投入堂”聖神社とアケボノツツジ観察会
- 4月 友の会運営委員会
- 5月23日(土) 友の会総会
- 6月6日(土) 仁淀川水質調査
- 6月23日(火)〔雨天順延〕
 - 横倉山のヒメボタル観察会
- 11月28日(土)・29日(日)〔一泊二日〕
 - 視察・研修(案①②)
 - ①犬山城(国宝)・安土城跡、郡上八幡
 - ②“天空の城”備中松山城・高松城、福井大野城、入りの松原

高知県越知町立

横倉山
THE YOKOGURAYAMA
NATURAL FOREST
MUSEUM, Ochi

自然の森博物館

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.kochi.jp/

- 開館時間: 午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料: 大人……………500円(※各20名以上)
高校・大学生……………400円(上の団体は100円引き)
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知—JR特急 約30分—佐川—バス 約15分—越知
JR普通 約60分

